

# 通州事件アーカイブズ設立基金

Fund for Archives of Tongzhou Massacre

## NEWSLETTER VOL. 5

2019. 5. 15

### 本号の内容:

すべての歴史は検証されるべきである、されど

2

真山青果実の幻の戯曲  
「嗚呼通州城」から

3

通州メモリアル2

近水楼(きんすいろう)

4

SHOUWA12 What's

happened? 1 半島人三様

6

事務局だより

8

編集後記

8

## 第3回総会のお知らせです

下記の通り第3回総会を開催します。本年度の出版を中心とした活動予定など重要な議題もございますので、会員の皆様はぜひご参加ください。

日時：令和元年（2019年）5月30日（木）

午後6時開場 6時半開会

場所：文京福祉センター江戸川橋 4階学習室

（東京メトロ 有楽町線「江戸川橋」4番出口徒歩4分）



総会では但馬オサムさんのミニ講演も行われます。

演題：ビジュアルで見る通州事件

参加費無料（参加は会員限定）

通州事件とは：

1937年7月29日、北京東方18キロの通州。日本の駐留部隊が作戦のため留守にしたスキを狙い、親日地方政権とされていた冀東防共自治政府の治安組織である保安隊が反乱を起こしました。その結果、無辜の日本人居留民 200 人以上が無残に殺害されました。

## すべての歴史は検証されるべきである、されど

但馬オサム



『支那事變寫真全輯(中)上海戦線』  
(朝日新聞社・昭和13年)  
「南京陥落後旬日にして、早くも平和の曙光に恵まれた市中では、皇軍将士と共に玩具をもてあそんでたわむれる支那の子供達…(12月20日撮影)」

最近、Twitter でちょっとした炎上があった。火種は、高須クリニックの高須克弥医院長の「南京もアウシュビッツも捏造だと思ふ」というツイートである。これに関してはいわずもがなの結果がまっていた。医院長のツイートには「歴史修正主義者め」「ナチ擁護者」、はてには、「狂ったのか」といったたぐいのリプライが殺到した。それらひとつひとつにまじめに応え、ひるむことなく自説を通す医院長の姿勢が印象に残った。

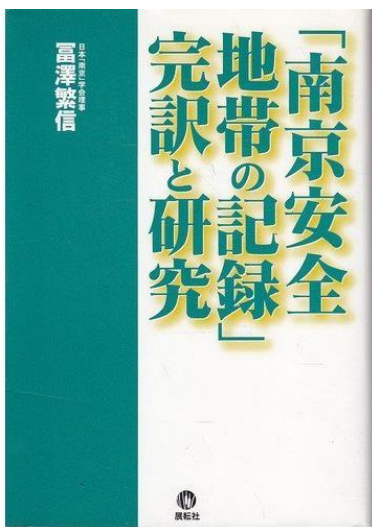
字数制限140文字という Twitter の性格上、どうしても言葉足らずになるのは仕方がないが、前後のツイートを読む限り、医院長は、ナチスによるとされる「ガス室による大量殺害」を科学的見地から疑問視しているのであって、決してナチスのユダヤ人迫害それ自体を否定しているのではないのは確かである。

『すべての歴史は検証されるべきだと思います。』という医院長の主張は何も間違っていない。現に、長い間、ナチスの仕業と言われてきた「カティンの森虐殺事件」の真犯人が、ソ連共産党であることが近年「検証」の末に明らかにされ、「歴史」が「修正」されたではないか。

ただ、ひとつ医院長のツイートに憂慮するとすれば、「南京事件」と「ナチス」を並列して語ったことである。両者はまったく別のイシューであり、「検証」に関してはそれぞれ別に行われなければいけない。ただでさえ、内外の反日勢力は、「旧日本軍」と「ナチス」を同一視する印象工作(「旭日旗」を「東洋のハーケンクロイツ」と言いつけるのは、その一例)に余念がないのである。高須医院長のツイートは「ナチ擁護者が否定する南京大虐殺」という形で彼らの工作に利用されかねないし、南京事件の虚構性について研究検証してきた人々の足元に小石を置くことにもなりかねない、ひいては「通州事件」の検証にも何らかの影響を与えかねないという憂慮である。

「通州事件」は歴史的な事実であり、「南京大虐殺」は虚構である。ナチスのガス室の存在の有無に関しては、今後の検証の結果を待ちたい。ただし、その検証は、ドイツ人、少なくともヨーロッパの人たちの手でなされるべきであって、われわれ日本人ではない。

南京事件、慰安婦強制連行、集団自決軍命令、そして通州事件……われわれはそれらの検証と真実の発信だけで手一杯なのである。



『南京安全地帯の記録完訳と研究』  
(富沢繁信著・展転社・2004年)

## 真山青果実の幻の戯曲「嗚呼通州城」から

三浦小太郎（評論家）

通州事件を描いた真山青果の戯曲「嗚呼通州城」は、通州事件のあった昭和12(1937)年9月に、明治座で上演され、後に『真山青果全集』第12巻(大日本雄弁会講談社、1941年)に収録されました。しかし、戦後再刊された全集には未収録となっています。ここではその一部を紹介します。

舞台は1937年7月29日午後から夜、通州城内の日本旅館「銀明楼」。これはもちろん、実際に被害にあった近水楼がモデルです。主人公は、女主人の「おたみ」。彼女は軍人の寡婦であり、同時に、日中の友好を心から望む人間として描かれ、日本軍からも信用されている女傑という設定です。

彼女は、日本軍があくまで治安維持と平和のために闘っているのであり、自分たち日本人も、決して民族への憎しみや偏見を持ってはいけなと語ります。

「日本人は、いま現に、あの鉄砲を打ちながらも、その弾が支那人に当たらないやうにと願つてゐるのだよ。ね、決して支那人を殺すために射つてゐるのぢやないのだよ。日本軍は、あの鉄砲の音に、固く中立を守つてゐる冀東の人民を、信じようとしてゐるのだ。支那をせめる、支那を苦しめるなど、思ひ違ひしてはいけな

いよ」(嗚呼通州城)。

しかし、店で働く「おきよ」は、事態が不穏であり、お客さんを逃がすなり、店の防衛を固めるなりする必要があるのではと問いかけますが、「おたみ」は聞き入れません。

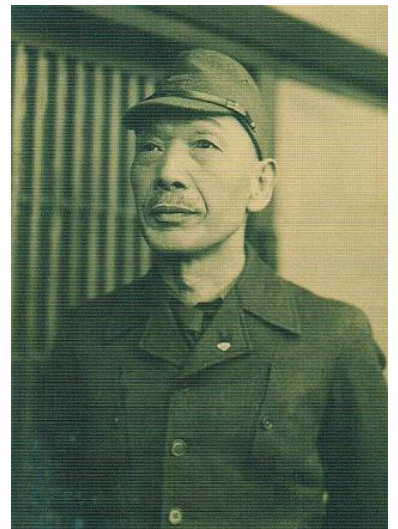
(おたみ)「えゝお前、わからないね。二十九軍はいま、中央軍から睨まれてゐるんだ。日本軍に背いたら、自分の立つ瀬のないぐらゐは知つてゐる。騒いぢやいけない。決して保安隊は、日本に背く筈はない。」

(おきよ)「その筈のないところに動くのが支那人です。油断しては、とり返しをつかないことになりませう」。

(おたみ)「(前略)いつもわたしが云ふことだが、おまへさんは、さう支那人を疑ぐるからいけない。わたし達は、支那人のふところに入つて、同じ心になつてあの人たちを見なければいけない。支那人と云つたつて、別の人種があるのぢやないよ。やツぱり同じ人間なんだよ」

しかし、保安隊は深夜反乱を起こし、無防備な銀明楼は襲撃されました。お民は絶望して叫びます。

「矢張り支那人は、わたしまでを射つた！信じられる国民ぢやない。もう斯うなれば……徹底的に懲らしめるよりほかはない。日本軍の威力を見て、初めて自分の非を悟る国民だ！」「わたしを射つたのは、わたしの信じた支那人だよ。支那人を教へるには、まづ懲らしめるより外はないと、日本軍の人たちに、さう伝えておくれ」 今一部を読み返すだけでも、当時の日本でこの戯曲がかなりの衝撃を与えたことが推察されます。



真山青果(まやま・せいか)

1878～1948

劇作家・小説家。正宗白鳥らと自然主義気鋭の作家として注目を浴びる。のちに劇作家に転じ、新派の座付き作家として、数多くの名作を残す。代表作に、『元禄忠臣蔵』、『平将門』など。



日本・満洲・冀東自治政府・協和  
(当時の子供むけすごろくより)



## 通州メモリアル2 近水楼(きんすいろう)

但馬オサム



近水楼地図

通州城内の北側、蓮池の南のほとりに位置する日本人経営の旅館兼料理屋である。通州事件時、ここは宿泊客、女中合わせて十数人が殺される惨劇の舞台となり、同事件の象徴的な建造物のひとつとなっている。また、他の宿泊客の多くも数珠繋ぎで連行され直後に射殺されている。ただし、近年の通州事件関連の記事の中には、この近水楼と旭軒(やはり城内にあった遊郭兼飲み屋)の被害状況を混同した記述も散見するので注意が必要である。「カウンターの上に女給の生首が並んでいた」のは近水楼でなく旭軒での出来事だ。

近水楼といえば、事件直後の、血だまりになったロビーの写真が有名だが、今回紹介するような全景写真は大変珍しいものではないだろうか。写真で見る近水楼は、建物正面のポーチ、横に組んだ白板の外壁、多数の大きな窓が特徴の、典型的なコロニアル様式のモダンな建物(2層屋根裏部屋付き)で、おそらくは西洋人建築家による設計と思われる。遠く熱灯舍利塔を望む2階からの眺めは絶景で、玄関前、横、後方に蓮池に通ずる通路があり、周辺は緑豊かな環境だったという。

屋根裏部屋部分に格子窓が見える。事件当時、近水楼に宿泊していた同盟通信記者の安藤利男は、数人の客とともに、この窓から屋根裏部屋に侵入、息を殺しながら保安隊の行き過ぎるのをひたすら待ったという。しかし、結局見つかってしまい、同じ窓から引きずり降ろされている。



蓮池との位置関係を見る限り、玄関は西向きということになる。庭はかなりかなり広く、贅沢な作りになっている。煙突は暖を取るためのマントルピースにつながっているのだろうか。中国側の資料によれば、近くに給水塔があったようだが、写真からは確認できず。

安藤によれば、蓮池方向から銃声が近づいてきたのが7月29日午前9時頃。間もなく建物裏側の窓ガラスが銃声とともに四散、まず暴徒が乱入し1階に逃げ遅れた8人が彼らの毒牙にかかった。暴徒による殺害と略奪(客の財布、荷物はむろん、畳、家財までも)が終わると今度はそれに代わって保安隊が略奪を始めたという。電話線は切断されていた。



全景写真をもとに、近水楼の隆盛時をイラストでイメージ再現してみました。真ん中の女性は佐々木テンさんのつもり。(画・但馬オサム)

「近水楼入口で女将のらしき人の屍体を見た。足を入口に向け、顔だけに新聞紙がかけてあった。本人は相当に抵抗したらしく、きものは寝たうえで剥がされたらしく、上半身も下半身も暴露し、四つ五つ銃剣で突き刺した跡があったと記憶する。陰部は刃物でえぐられたらしく血痕が散乱していた」(桂鎮雄隊長代理)

事件4日後の8月2日に現地入りした文藝春秋社北京特派員の武島義三は近水楼に足を踏み入れたときの様子を、「玄関からそれに続く廣間などは目茶苦茶で血沫(ちしぶき)は飛び、どす黒い血潮は餅を置いた様に厚みをもって床の上に固まってゐた」(『話』S12年10月号)と記している。1階には6～7体の遺体が棺もなく並び、うだる夏の陽気に激しい異臭を放っていた。さらに女中部屋には6人の女中の死体が残され(第二連隊歩兵隊の桂鎮雄隊長代理の目撃では女中の死体は4体)、それらは「頭といはず、顔、首、胸、手足、殊に腹部より下の対しての残忍極まる鬼畜もなさざる虐行を敢えてしてあった」という。部屋の壁に毛髪のある女の頭皮がへばりついているのを見たのは特務機関の許斐利氏だ。

また、生存者の一人、佐々木テンは、事件当時、近水楼の前に広がる蓮池は投げ込まれた無数の死体の血で、水面が赤く染まっていたと証言している。

近水楼の建物はむろん、現存していないが、戦後、共産党政府によって内部が改修され映画館としてしばらく使用されていたとのことだ。



# SHOUWA12 What's happened? 1

## 半島人三様

但馬オサム

昭和12年とはどんな年だったか、どんなことが起こったのか、何が流行ったのか。このコーナーでは、アカデミズムが掬いあげることのない、エンタメや風俗、三面記事などから「昭和12年」を振り返ってみたいと思う。



読売新聞 昭和12年8月4日

通州で戦死の六警官（上から金東旭、草場敏夫、石島戸三郎、千葉良吉、日野誠哉、濱田末吉の諸氏）

# 通州叛亂隊と死闘 六警官殉職戦死

## 悲壯・夫人子供ら七名も

通州叛亂事件で壮烈な殉職戦死を  
とげた六警官とその家族たちの悲  
壮な最期の奮闘が、蘇州参事  
官から三日外務省へ報告されてき  
た。通州の外務省参事官は昨秋  
十月一日開設され分署代理連署

省警務隊千栗良吉（上）参事官敏夫  
の殉職を聞き加へ（参事官敏夫は六名で  
固めてゐた。事件勃発の廿八日朝  
夜から何となく不穏の気が感じら  
れるので夜八時半参事官は第一號の  
制服に身を固めて非常警戒を始め、

参事官敏夫（上）参事官敏夫は六名で  
固めてゐた。事件勃発の廿八日朝  
夜から何となく不穏の気が感じら  
れるので夜八時半参事官は第一號の  
制服に身を固めて非常警戒を始め、

参事官敏夫（上）参事官敏夫は六名で  
固めてゐた。事件勃発の廿八日朝  
夜から何となく不穏の気が感じら  
れるので夜八時半参事官は第一號の  
制服に身を固めて非常警戒を始め、

通州事件の衝撃もまだ生々しい8月4日付の読売新聞。まず目を引くのは、『通州反乱隊と死闘 六警官殉職戦死』という見出しだ。殉職した警官6人の顔写真が並んでいるが、筆頭で紹介されている「金東旭」巡査は、名前からもわかるように半島人である。朝鮮読みでは「キム・ドンウク」。金巡査は、「咸鏡北道」の出身とあるから、今でいえば北朝鮮の人ということになる。享年34。妻子を残しての無念の死だった。

他にも、通州関連記事がいくつかあるが、ここで取り上げたいのはその下の記事である。『悪どいドンファンぶり 半島出のダンス教師』という怪しげな？見出しが躍っているのが見えるだろうか。警官殉職を伝える悲壮な記事の次だけに、よけいに悪目立ちしている。

《半島出身の不良ダンス教師として警視庁内鮮課は数日前から蒲田区××金星舞踊教授所・金田愛次郎こと金應哲(20)を蒲田署に留置取り調べている》とある。事件のあらましを説明すると、この金應哲(朝鮮読みはキム・ウンチョル)は東京蒲田にダンス教室の看板を掲げ、女子医大生をはじめ、カフェの女給、ダンサーなどを次々とたぶらかし、金品を巻き上げていたということらしい。要するに「色事師」「すけこまし」「女性の敵」というやつである。内鮮課は当時、特高警察にあり、独立運動の過激分子、いわゆる不逞鮮人を監視取り調べるセクションであった。その内鮮課の網になぜ「すけこまし」が引っかかったのかは不明である。あるいは、これは単なる別件逮捕なのか。

ちなみにこの金應哲は「平安北道」生まれ。同じ朝鮮北部の出身、同じ金姓でありながら、先の殉職巡査とはえらい違いである。興味深いのは、彼が「金田愛次郎」と名乗っていたということ。創氏改名令(昭和15年)以前に、このように勝手に日本名を名乗っていた半島人も少なからずいたということである。

さらに、その横にある記事にも注目したい。

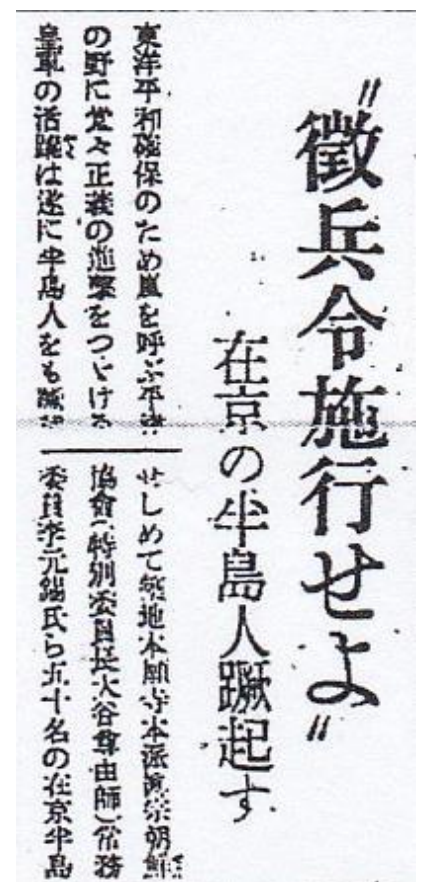
『“徴兵令施行せよ”在京の半島人蹶起す』。

記事を要約すると、李元錫(朝鮮読みはイ・ウォンスク)を代表とする朝鮮の内地留学生真宗信徒が東京築地本願寺で集会を開き、《国家非常時に際しわれら半島出身者も坐して黙視するに能はず。即時朝鮮に徴兵制を施行されし》という決議をなして嘆願書を衆・貴族両院に提出したというのである。

盧溝橋事件以来、朝鮮人若者の間に日々募る暴支膺懲の激しい熱情は、日本人のそれを上回るものがあつた。支那大陸の歴代王朝の隷属に甘んじていた歴史的恨みも無縁でなかろう。通州での被害者の約半数は朝鮮人である。彼らの怒りは頂点に達していた。

翌、昭和13年、朝鮮に志願兵制度が導入されると、応募者が殺到、年を追うごとにその数は増え、最高50倍の狭き門となったという。

この時代、内地人だけではなく、半島人もまた熱かったのである。





**通州基金アーカイブズ設立基金**

当基金は、通州事件についての資料の発掘、調査、保存、普及のためのNGOです。

基金の規約では、「基金の活動に参加する」か、または「何らかの形で活動を支える意思のある人」を会員として、基金から依頼することになっています。会員となっても、会費は一切徴収しません。会の事業を進めるために、「企画部会」、「調査・研究部会」、「対外コミュニケーション部会」の三つの部会が設置され、会員は希望に応じ、どの部会を中心に活動するか申請することができます。基金の会員として通州事件の真実を広める活動に参加して下さいませう、お誘いします。

\*入会をご希望の方は、下記のいずれかの方法で設立基金事務局までご連絡ください。

FAX  
03-6912-0048

メール  
ftmj0729@mail.com

ホームページ  
URL

<https://tsuushuujiken.com/about>

**事務局だより**

- 当基金としては、何よりも取り組まなければならないのが、通州事件についての記録を集成することです。そして現在、担当者の石原氏の尽力により、事件当時の新聞資料を、ほぼ網羅して集めることができました。この新聞資料をまず出版するための打ち合わせに入っております。悲劇的ではありますが、日本現代史の貴重な記録となることと思います。
- また、現在の中国で、この事件がどう論じられているかも気になるところです。中国研究者の方々のお力を得て、彼らの側の言説も紹介していく予定です。昭和12年学会も始まり、そちらでも通州事件関連の学会報告がなされています。日中現代史の闇が、タブーなく照らし出されていく日も決して遠くないと思いますが、私たちの活動もその一助となれば光栄です。
- 昨年に引き続き今年も7月29日、靖国神社で慰霊祭を行う予定です。猛暑の最中、ご無理のない範囲でぜひご参集ください。今後ともこの悲劇の日を忘れぬよう、この慰霊祭は継続してまいります。

**編集後記**

ニュースレターの発行が遅れたことを心よりお詫び申し上げます。本会は活動というよりも、記録集成や出版を通じて通州事件の記憶を歴史にとどめることを主目的にしております。そのためには皆様のご支援が不可欠であり、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

最近出版された『もう一人の昭和維新』伊藤悠可著(啓文社書房)にきわめて印象的な文章がありました。「戦争の悲惨さを語り継ぐことが大切だという人がたくさんいるが、そんなものはだめだ。この世には、地上には、凌辱というものがあるのだ、ということを語り継いでいく大切さを筆者は思う」。済南事件における蒋介石軍の蛮行について述べたものですが、これは通州事件にも共通する問題のように思えます(三浦)